

「佐々木嘉則賞」について

第二言語習得研究会会長 鎌田修

佐々木嘉則賞は、2011 年 1 月に 53 才という若さで生涯を終えられた元お茶の水女子大学准教授佐々木嘉則先生の業績、ならびに、本会への貢献にちなんで創設された賞で、本ジャーナルに掲載された論文（一般投稿のみ。寄稿などを除く）を授賞対象としています。本ジャーナル第 14 号（2012 年 12 月刊行）に掲載された論文から授賞が始まり、今回が第 4 回の授賞となります。

本賞は、佐々木先生の遺作『今さら訊けない…第二言語習得再入門』（2010, 凡人社）の印税を一部とすご遺族からの寄付金を基に創設されました。佐々木賞編集委員会が選考した候補論文を幹事会が承認した後、全国大会の場で発表、表彰することになっています。寄付金相当額の 20 分の 1 を副賞に当て、寄付金がなくなった時点で賞は終了となります。

生前、佐々木先生は、本「第二言語習得研究会」の幹事、広報委員等を務め、会の発展に多大なる貢献をなさいました。本研究会のますますの発展のためにご尽力下さった佐々木先生の御遺志がこのような形で途絶えることなく生かされていくことを願っています。

第 4 回 佐々木嘉則賞の授賞について

第 4 回佐々木嘉則賞の授賞論文、および、選考理由は以下の通りです。

論文題目： モノリンガルおよびバイリンガル日本語学習者の文処理
一競合モデルに基づく類型論的観点からの分析—（研究論文）
著 者： 白 春花・向山 陽子

選考理由：

本論文は、競合モデルに基づいて、目標言語の文処理における既習言語の手がかりの働きを、言語類型論的な類似性の観点、さらには L2 習得と L3 習得の相異の観点から検証したものである。中国語モノリンガル、モンゴル語モノリンガル、両言語のバイリンガルの日本語の文処理における統語的手がかりの使用および「読み時間」を詳細に比較することにより、バイリンガルがモノリンガルとは手がかりの用い方が異なること、バイリンガルにおいて手がかりの連携と競合がプラスにもマイナスにも働き得ることを初めて実験的に示した意義は大きい。また、日本語が L3 であることを活かした、希少な L3 習得研究である本論文の知見は、今後の言語転移研究の理論的発展に寄与する可能性も高いと考えられる。

よって、本論文を第 4 回佐々木嘉則賞授賞論文として選考する。